

社会課題を持続的に解決していける 社会づくりに向けて

九州地域ソーシャルビジネス・コンソーシアム
運営委員長

公益財団法人九州経済調査協会
常務理事兼事業開発部長

岡野 秀之 OKANO Hideyuki

本書は、ソーシャルビジネスを実践されている皆さまと、これからソーシャルビジネスの立ち上げを考えていらっしゃる社会起業家の皆さま、ならびに、ソーシャルビジネスに関心を持っていらっしゃる皆さまに、勇気と希望を届けたいとの思いで取りまとめたものです。

世の中は多種多様な社会課題にあふれています。これらひとつひとつの社会課題の解決に向けて、多くの方々が情熱と創意工夫をもって取り組まれています。その一方で、簡単に解決する社会課題は皆無であり、中長期にわたって継続的に取り組む必要があるものばかりです。解決に向けた取り組みを「持続的に」進めていくためには、その活動主体・事業主体そのものの持続性の担保が不可欠だと考えます。

そこで、社会課題を持続的に解決していける社会づくりに向けて、ソーシャルビジネスに強い期待を持っています。経済産業省「ソーシャルビジネス研究会報告書(2008年)」によると、ソーシャルビジネスとは、様々な社会的課題を市場ととらえ、その解決を目的とする事業として、社会性、事業性、革新性の3つの要素を兼ね備えたものと定義されています。困難な社会課題の解決を、事業として、ビジネスとして取り組む。これには、情熱や強い意志に加えて、冷静で磨き抜かれた知恵と工夫がなければ実現できません。個人的には、顧客や収益構造、競争相手が明確なベンチャー企業やスタートアップの創業よりも、受益者や収益構造、ステークホルダーが不明確なソーシャルベンチャー(社会起業)の方が、創業や事業継続は難しいのではないかと考えています。社会起業は、並大抵のことではありません。しかし、その社会課題の解決に向けた明確なストーリーを描き、伝え、共感を得ることができれば、一緒に事業に取り組む仲間や応援団(ステークホルダー)の輪が広がり、社会に大きなインパクトをもたらす可能性を秘めているとも感じます。特に、昨今は、公民連携やSDGs経営など、行政や民間企業の「パートナーシップ」による社会課題解決への関心は高くなっています。社会課題解決を担うソーシャルビジネスセクターの皆さまが、丁寧な社会課題の把握と分析を行い、解決に向けたストーリーを描き、ステークホルダーとそのビジネスモデルを共有する循環モデルの「輪の中心」として大きな役割を演じることが求められていると感じています。

本書では、「輪の中心」としてソーシャルビジネスを実践されている事業者の皆さまの先進的な事例を取りまとめました。対峙する社会課題に対する理解と、その解決に向けた知恵と工夫、すなわちソーシャルコンセプトやビジネスモデル、ステークホルダーとの関係性などを読み取ることができると思います。ソーシャルビジネスの3要素である社会性、事業性、革新性についても、しっかりと取りまとめています。そして、それぞれのソーシャルビジネスにたどり着いた着想の経緯について、実践者の皆さまの経験や葛藤も生々しく描いています。どの事例も決して順風満帆というわけではありませんが、実践者の熱量や紆余曲折を経て導き出された工夫の数々が文面から伝わってくると思います。皆さまの活動に引き寄せつつ読み進めていただき、ご自身の活動

の理解を深める一助となれば幸いです。

本書は、2020年度通常枠の休眠預金等活用事業で資金分配団体として採択をいただいた「九州地域ソーシャルビジネス・コンソーシアム」の3年間に渡る活動成果のひとつです。同コンソーシアムは、公益財団法人九州経済調査協会と一般社団法人ユヌス・ジャパンとのコラボレーションによって、九州地域にソーシャルビジネスの輪を広げ、社会の多くの方々が、ソーシャルビジネスを通じて社会課題解決を図ろうとする循環モデル地域を構築したいという理念の下で事業を進めてきました。本書に掲載している5つの実行団体とは、ソーシャルビジネスの新事業構築に二人三脚で取り組むとともに、そのほかの多くのステークホルダーとの連携を通じて、社会的インパクトの増大と、将来につながる事業継続の道筋を模索してきました。その5団体の活動成果も掲載しています。

なお、本書の作成にあたっては、九州大学ユヌス&椎木ソーシャル・ビジネス研究センター(SBRC)の多大なるご協力をいただきました。監修を務めていただいたセンター長の星野裕志教授をはじめ、同センターOBの株式会社ケース・ラーニング石松かおる代表には、ケースのとりまとめの過程において、掲載事業者の皆さまやプログラムオフィサーとのディスカッションもさせていただきました。これが相互の刺激となり、事業の理解を深め、今後に向けたブラッシュアップにも繋がったのではないかと思います。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

最後に、本書を手にとっていただいた皆さまにも深く感謝いたします。本書が、ソーシャルビジネスへの理解や関心を高めることに繋がり、ソーシャルビジネスで社会課題を解決していこうとする動きを広げる一助となれば幸いです。

さあ、これからソーシャルビジネスの先進事例という海原への出航です。楽しみながら、思考を巡らせる旅に出かけましょう。